

工匠館第7回特別展

刺繍ひとすじ七十年 天野一政作品展

2月7日(土)~15日(日)
午前9時~午後5時
入場無料

工匠式番館では、来る2月7日から15日までの間、特別展を開催します。

今回は、区登録無形文化財(工芸技術)保持者の天野一政さんの刺繍作品を展示します。



下町文化

NO. 224
2004.1.14

発行
江東区教育委員会
生涯学習部生涯学習課
〒135-8383
江東区東陽4-11-28
TEL(03)3647-9819
<http://www.city.koto.tokyo.jp/~bunkazai>

工匠館第7回特別展

刺繍ひとすじ七十年 天野一政作品展

芭蕉記念館新展示

其角とその系譜

芭蕉 - その人生と旅 - 他

歴史と生活展

富士信仰と近郊農村の祈り

写真展「江東のむかしといま」

中川船番所資料館

特別企画展記念講演録

小名木川をめぐる流通と商人たち

中川船番所資料館企画展

校歌に見る江東区の原風景

第二辰巳小学校に30周年資料室

第5回「江東ふるさと歴史研究」

入選者表彰式

天野さんは、大正12年に区内富岡で生まれ、昭和11年に渋谷区の刺繍職人・渋谷仙太郎氏(つた屋)に弟子入りし、同18年まで修業を積みましました。

戦後、横浜で独立して「天野刺繍」を開業しました。当時は、進駐軍向けに土産物のジャンパーやガウンの刺繍を手がけました。同28年に牡丹に移転し、縫紋(刺繍による紋)の仕事再開。同31年に白河に移り、まもなく東京刺繍協同組合に加入して仕事を続けました。平成元年に、刺繍(紋章)技術を対象として区登録無形文化財(工芸技術)保持者として認定されました。その後、江東区伝統工芸展(毎年11月開催)において、出品や実演公開などをおこない、区内外に縫紋の技術を紹介しています。同13年には、東京都優秀技能賞を受賞されました。

今回の展示では、縫紋額のほか、縫紋がほどこされた着物を展示します。また天野さんの刺繍技術をあますところなく見られる刺繍額など、色とりどりの作品もご覧いただけます。

会場 工匠式番館

(森下文化センター内、

森下3 12 17)

2月7日(土)・8日(日)・11日

(水・祝)・14日(土) 午前11時~

午後3時まで作者の実演公開あり。



縫い紋の各種（中央が加賀紋）

縫紋とは

日本刺繍は、絹糸を使って、絹地の表面に図案を縫いあらわす技術です。

その歴史は古く、日本では飛鳥時代よりおこなわれていました。今日では、羽織や振袖、帯などの和服をはじめ、額絵、能や歌舞伎の衣装、舞台の緞帳など、さまざまなところに使われています。

刺繍は、紋付きなどの紋章を描くときにも使用されます。筆で描く描き紋に対し、刺繍による紋章は「縫紋」と呼ばれます。

紋章は、1000年代前半、公家が衣服や調度品に好みの文様を用いたのがはじまりといわれています。鎌倉時代中ごろになると、武家が自己の武功をしめす必要から、他人と区別するた

めの目印として紋章を用いることが一般化しました。モンゴル襲来（1274・1281年）のころには全国に広まっていきます。今日見るような明瞭かつ単純な図様の紋章は、このころから形作られてきました。

江戸時代に入ると、菊・桐・葵紋、および領主の紋を除いては、苗字のように紋の使用を禁止されることはなかったことから、紋付きを着ることのできる者は、勝手次第に紋を用いていました。流行の最先端は役者の紋で、好みの衣装の模様や図柄がまねされ、紋章の優美化、替紋の増加に一層拍車をかけました。

縫紋は、江戸時代の初めごろ（1600年代後半）から一般的になったといわれます。ただ、京都・大坂では江戸より遅れ、1800年代前半ごろから流行しました。女性の訪問着などには、加賀紋と呼ばれる紋章が刺繡されることがあります。加賀紋は、紋のまわりに梅・竹・蘭・菊の四君子をあしらったりする装飾的な紋です。縫紋はあまり目立たないように刺繡するのがよいとされ、さまざまな刺繡の技術が生かされています。

紋の縫い上がるまで

型紙の彫刻 客の注文に応じて渋紙に紋の型を小刀で彫ります。



仕事中の天野一政さん。仕事場の雰囲気にも注目。

紋帳にない紋や図柄は、客の注文にそって、自分で考えて彫ります。

生地準備 生地に刺繡する場所を決めます（ツモリを入れるという）。紋の頭がくるところに印をつけて、は縫いをします。

生地を張る 作業台の上に、角枠をのせ、生地を張ります。角枠には布がまいてあり、生地の厚さによって調整します。生地は、四方から同じ力が掛かるように均等にピンと張りまします。同じ力で張らないとできあがった紋の形が崩れます。

型をうつす 生地に型紙をのせて、胡粉を用いて型を写します。
糸を撚る 釜糸（撚っていない糸）

を、紋章の種類や図柄に合った太さに撚ります。金糸・銀糸はそのまま使用します。

縫う 刺繡します。普通の刺繡に使う針よりも細い針を用いることが多いです。ケシ、カゲスガ、ジャバラ、ヒナタ、カゲ、マツリ、ベタなど10種類以上の縫い方を模様に応じて使い分けまします。金糸・銀糸を用いる場合は、直接縫いつけず、他の細糸でとめまします（トジマワシ、金コマヌイという）。

仕上げ 刺繡が終わると、裏に糊を塗って糸を定着させまします。太い糸を用いた場合は、さらに湯のしをまします。は縫いをとき、反物の状態にもどして完成です。

展示構成
日本刺繡とは？／縫紋とは？
天野氏年譜／作品展示／工程記録ビデオ上映



折鶴に花の丸 家紋風（子供物被布 一越ピンク地）

芭蕉記念館新展示

其角とその系譜 芭蕉 その人生と旅

他

平成16年6月13日(日)まで

*新出「芭蕉書簡」特別展示

平成16年2月1日(日)まで

今回の展示では、これまで、幻の芭蕉の手紙といわれてきた、貞享4年(1687)4月3日付の「林桐葉あて芭蕉書簡」を所蔵者のご好意により、特別展示しています。(2月1日まで)

*新出「芭蕉書簡」

林桐葉あて芭蕉書簡

(貞享4年4月3日付) (個人蔵)

本紙 縦27・2cm、横80・4cm

文化13年(1816)刈谷の秋拳が筆写したものの原簡で、187年ぶりに再発見されたもの。

内容は、芭蕉の先に出した手紙が事故で紛失したことや、江戸の俳諧宗匠一晶と芭蕉の点のつけ方の違い、また熱田の叩端子の句を「御佳作」とほめ、その他同地の東藤子・工山・大田氏・市右衛門などの名が出てくる。秋拳の筆写には2行分の脱文や誤写などがあり、今回の原簡によって正しい本文を得たことになり貴重である。ま



新出 林桐葉あて芭蕉書簡(個人所蔵)

本書簡は懐紙2枚をついで染筆された貞享期の珍しい書簡で、「芭蕉桃青」と記した下に花押が書かれているのも注目になる。桐葉は熱田の人。
(解説 早稲田大学教授 雲英末雄)

其角とその系譜

元禄7年(1694)芭蕉が没すると江戸の俳壇は、生前芭蕉から「草庵に桃桜あり、門人に其角・嵐雪有。」

両の手に桃と桜や草の餅

と句に詠まれ、高く評価されていた、其角と嵐雪を中心に発展します。

其角の作風は、芭蕉の閑寂とは対照的で、都会趣味に満ち、また華麗かつ闊達であり、ときには豪放さを伴って展開し、江戸市民の人気をさらいます。

門下には、巴人・秋色・淡々・湖十を輩出、交友関係も多彩で、大坂の西鶴、伊予国松山藩主松平定直(三嘯)や備前松山藩主安藤信友(行露)ら大名、また紀伊国屋文左衛門(千山)・伊勢屋七郎兵衛(大町)らの豪商がいました。

さらに、新興の沾徳一派と合流、彼らの俳風は、身近な世態人情を軽妙に表現する洒落風と呼ばれ、江戸俳壇の主流となります。

一方嵐雪は、宗匠として独立しますが、晩年は参禅して法体となり、次第に俳壇から遠ざかっています。

今回の展示は、其角から、湖十、永機、機一、永湖へと続く江戸座と呼ばれる一つの系統を取り上げました。

写真は、姫路藩16代藩主酒井忠以の弟で、画家であり、俳諧もたしなんだ



酒井抱一筆 其角肖像

酒井抱一の描いた其角肖像です。文化3年の其角百年忌の際に描いたとされる百幅の肖像画の一つとみられ、肖像画の上には、其角を賞賛する文と句が添えられています。

江戸に生まれ、江戸の洒落、粋の世界をこよなく愛した、其角とその系譜の人々の作品を御覧ください。
(左部純子)

芭蕉記念館

開館時間 午前9時30分〜午後5時

(4時30分までにご入場ください。)

展示室休室 月曜日(祝日を除く)

入館料 大人100円・小中学生50円

交通 都営地下鉄新宿線・大江戸線

森下駅下車 徒歩7分

問合せ 芭蕉記念館

江東区常盤 1 6 3

03(3631)1448

歴史と生活展

富士信仰と近郊農村の祈り

今回のテーマは富士塚を中心とした江東区内の民間信仰についてです。江東区には3つの富士塚を始め、近郊農村特有の民間信仰が見られます。

この展示会は区民の方々より寄贈された6000点を超える民俗資料の中からテーマに合ったものを選び、展示・解説していくものです。

古来より富士山は霊峰として信仰を集めてきましたが、とりわけ江戸時代には「江戸八百八講」と呼ばれるほどのおびただしい数の富士講が活動し、多くの人々が登拝しました。富士を信仰する人々は住居の近くに富士山を真似た「富士塚」を築造し、毎年6月1日（旧暦）に山開きを行いました。この行事は江戸の夏の風物詩となっていました。



参詣者でにぎわう深川富士（江東区教育委員会蔵『東都歳事記』巻2）

伝統ある山開き行事も行われました。富賀岡八幡宮（南砂）の富士塚も、吉御水講が今も富士登山を行っており健在です。多くの人々を惹きつけた富士塚・富士信仰とは一体どのようなものだったのでしょうか。現在に残る遺品・石造物の拓本などを通して探っていきます。



昭和30年ごろの砂村富士（南砂 富賀岡八幡宮）

一方、江戸の近郊農村であった城東地域には、富士信仰だけでなく庚申待ち行事のモニメント「庚申塔」や念仏講である「四十町講」に関わる特色ある民間信仰が見られます。砂村の旧家・大石家では、四十町講の講元と成田山の「八日講」の講元も兼ね、富士講にも属していました。大石家から持宝院（北砂）に寄贈された数多くの掛軸や同じ苗字を名乗る旧大石家住宅の屋根裏に残されていた200枚を超える祈禱札は城東地域の旧家の信仰を物語るものとして貴重です。

展示会では区民の方々より寄贈された数多くの民俗資料のなかから、特に大島・砂町地区の民間信仰に関するものを展示いたします。



区登録有形民俗文化財「行衣」（鈴木隆氏所蔵）

ぜひ足を運んでみてください。

日時 1月24日（土）～29日（木）
午前9時～午後8時30分
1月26日（月）は文化センター
休館につき見学はできません

場所 江東区文化センター
2階展示ロビー（東陽4 11 3）

入場 無料

なお、この展示会に関連した講演会を行います。国指定の重要文化財「長崎富士」（豊島区高松）を調査された専門家がスライドを用い、富士塚の石造物の銘文から読み取れることをお話くださいます。江東区の富士塚と比べてみると大変面白いでしょう。

演題 「富士塚の石碑からわかること」
講師 豊島区立郷土資料館学芸員 福岡直子

日時 1月27日（火）
午後6時30分～8時30分

場所 江東区文化センター
6階第1会議室

参加費 無料

定員 60人（先着順）

申込 電話にて
申込先

生涯学習課文化財係
☎（3647）9819

「江東のむかしといま」

期間／1月26日(月)～30日(金)
午前8時30分～午後5時15分
(30日は午後4時まで)
場所／江東区役所2階ロビー
(東陽4-11-28)

なつかしい昭和30年代の古写真を中心に展示します。ふるさと江東の移り変わりをご覧ください。

江東区は、江戸時代から首都の一部として、開発がいちじるしく、風景がさまざまに変化してきました。変化をとらえた写真は郷土の資料としていろいろなことを語ってくれます。古写真には現在の様子をとらえた写真を添えました。昔と今を見くらべて、みなさんでふるさについて語り合ってみてはいかがでしょう。展示の前に、ここで何点がご紹介しましょう。



四ツ目通り (昭和40年頃)

は、現在の猿江2 4付近の交差点で、北の住吉方向を見えています。はす向かいには東京ガスの建物が見え、通りには都電が走っています。この都電28系統は、錦糸町駅前から猿江、東陽、門前仲町、茅場町をへて、丸の内にあつた都庁までを結んでいました(昭和44年 1969 10月、日本橋までに短縮)。市内交通の花形であった都電も、自動車の増加による路面渋滞のため姿を消していきます。昭和21年3月に開通した28系統も同47年11月に廃止されました。

は、現在の深川1 1・3付近で、東の冬木方向にのびていく葛西橋通りをとらえています。信号のあるところは清澄通りとの交差点です。手前の橋



葛西橋通り (昭和40年頃)



大島3丁目 (昭和31年9月)

は黒亀橋で、木場から隅田川を東西に結ぶ油堀川に架かっています

た。油堀川は昭和53年(1978)に埋め立てられ、現在、首都高速道路9号深川線が上を通っています。

は、昭和31年(1956)9月25日(27日に台風15号が区内を襲った時の写真です。江東区は台風の被害を数多く受けた地域で、昭和22年(41年)間に28回も被っています。左隅に写っている電柱に「大島3 110」とあり、ここは現在の大島3 2にあたり、明治通りを亀戸方面に向かって撮ったものです。

は、旧葛西橋を東砂側(現東砂515)から撮った写真です。旧葛西橋は現在の葛西橋から300メートルほど上流に架かっていました。大正14年(1925)に着工し、3年後の昭和3年(1928)に竣工しました。鋼桁で、長さは549.1メートル、幅は6.1メートルありました。しか



旧葛西橋 (昭和30年頃)

し、同38年に現在の葛西橋が完成し、その役目を終えました。橋の手前には「中村や」「やなぎ(やなぎやカ)」といった釣具屋が見えます。

は、現在の塩浜2 3・4の首都高速道路9号深川線が走っている所から、平久運河(へいきゅう)に架かる白妙橋を望んだものです。左右には浅上航運倉庫(現アサガミ株式会社)の倉庫群が立ち並んでいます。



白妙橋遠景 (昭和30年頃)



江戸開府400年
東

江戸開府400年事業

中山船番所資料館特別企画展

記念講演会講演録

小名木川をめぐる流通と商人たち

日本福祉大学専任講師 曲田 浩和

はじめに

いろいろな方が小名木川を見ていると思うのですが、少し前までは、モノがどこの地域からどのように江戸に入ってくるかということしか研究はされていませんでした。私は小名木川を通じて関東内陸から江東地域に入ってくる荷物を受け入れる側の視点から見る事ができないだろうか、誰がどのように実際にモノを積んで取引して、売買されて、という話を少し考えてみたいと思っております。生産者と消費者だけではモノは動きません。流通業者もまた、いろいろなタイプの人がいいて、船頭や小船に積み替える人、人足などいろいろな人がいます。そういうことをこの地域を中心として見ていきたいと思っております。

海辺大工町の解下宿渡世

海辺大工町というのは面白い地域だと前から思っていました。具体的には万年橋のところから扇橋までの小名木川南岸（清澄・白河）が海辺大工町となります。関東からモノが入ってくるひとつの拠点となる地域です。解下宿渡世というのは、利根川筋から船で入ってきた荷物を小さい船に積み替えて江戸市中に運ぶ者です。したがってモノが集まり、そこからいろいろな所へ行くという、まさに窓口の役割を果たした地域になるわけです。いつごろからこういつた渡世があったかということですが、海辺大工町で解下宿をしております境屋庄三郎の史料では、寛永のころ、小名木川が堀り入ったころからここで仕事をしています（海辺大工町町方書上）。利根川筋、渡良瀬川などの筋から運ばれた荷物を扱っています。具体的には武蔵国・下野国・上野国・常陸国・上総国・下総国あたりから運ばれる荷物を扱う渡世をしているということになります。この人たちは、幕府公認で両国橋の御用を務めています。両国橋の架け替えを優先的に行う、あるいは火防とか出水の節に御用を務めるということで幕府に認められており、幕府の役割を担っていることが家の由緒になっていました。しかし、せっかく幕府の御用を担っているのだけれど、だんだん稼業が衰微して



いく、これがどうしてかということに海辺大工町の問題があらわれています。

次に、解下宿がどういう形で渡世が行われているかということ、同じく境屋庄三郎の史料から見

ていきたいと思えます（小松原康之助家文書）。親の代から常州境河岸（茨城県境町）の小松原家と商売をしてきましたが、それを受け継ぎ、さらに弟に株分けをして、商売を広げていこうと考えているのが延享3年（1746）のことです。次に非常に断片的ですが、送られてくる蓮の荷物が江戸になかなか着かず荷主が難渋している。着船したら昼夜に限らず取扱い、解下の者たちが遅れるようなことがあったら、諸経費は境屋持ちとしますということが書かれています。リアルな荷主と解下宿の関係が描かれています。この史料は天保15年（1844）ですから、解下が衰微してきて、なんとしても荷主を確保したいという時期にあたります。次に、平塚河岸（群馬県境町）という所の史料を見ていきたいと思えます。利根川を遡って境を過ぎ、栗橋（埼玉県栗橋町）を過ぎますと平塚という河

岸があります。ここから積まれる荷物は大豆です。1俵が4斗8升入りの大豆25俵、船の賃金が金1分と銀6匁4分2厘、上州茂呂村（群馬県伊勢崎市）の百姓銀大夫（生産者・荷主）が平塚河岸に荷物を持っていき新蔵という船に積んで利根川を下り、関宿（千葉県野田市）から江戸川へ入り、海辺大工町の雑穀問屋上州屋喜三郎のところへやってきました。そして喜三郎が命じたのは金兵衛という解下宿へ荷揚をさせて、代金は喜三郎から江戸飛脚問屋を通じて上州の船問屋幾右衛門へ渡される（平塚河岸問屋北爪家・俵物取調帳）。このようにして実際の取引が行われているということがわかりました。

しかしこうした良い形だけではありません。船というのは「板子一枚下地獄」というくらい安定性が低いといえます。そこで難船の史料を見ますと、笹ヶ崎村（江戸川区）の名主、船堀村（江戸川区）の宿、それから深川の境屋庄三郎、境町船差喜惣次という4名が連印し、笹ヶ崎村界隈の村に対して出されたものがあります（須原家文書）。ここでは難船して流失したものがあっ

ても持って行かないようにということとともに、難船の状況をとてモリアルに「船底半分八打破ラレ」とまで書かれています。このように実際に史料を見ると、船渡世の者はこうした面倒なことも考えておかなければならないことがわかってきます。

どうしてこの商売がうまくいかなかったのか。最初のうちは非常に良かったのですが、だんだんと荷物が離れていくような状況があったのではないかと思っております。

海辺大工町から関東がみえる

海辺大工町には、小名木川が開削された後、寛永のころから舁下宿渡世が存在しています。その後、両国橋に関わる御用を務めるようになります。まず考えなくてはいけないのは、この中川船番所（大島）が出来る前は、小名木川の隅田川に近い所（常盤）に番所



物流の拠点・海辺大工町の位置

があったということ（区登録史跡「川船番所跡」）。ということは荷物の改めはそこで行われていた。海辺大工町というのは、荷物の改めを受ける前に着く場所です。17世紀前半には海辺大工町にモノが集まってくるといって構造が出来ていたのではないかと考えられます。それが中川口へ番所が移っていくと、そこで荷物を降ろす必要性が無くなってくるわけです。中川番所から直接神田（千代田区）や小網町（中央区）の方へ行ったりすると、だんだんとその稼業が成り立たなくなる。ただし昔からの縁があるので高橋や海辺大工町界隈に荷物を下ろそうかという人も引き続きいますが、だんだんと衰退していく。そうなると頼みの綱は幕府の御用だけで、このままでは幕府の御用も務められなくなるので、なんとかして欲しいということを幕府に願ひ出ています。こうした問題が18世紀後半に起こり、19世紀前半に深刻化するのではないかと思っております。

ふたつめは廻状をどのように廻すかというものです。いろいろな順達（じゆんたつ）を利根川筋に流すわけですが、起点はどこかということ。幕末になってても起点は深川海辺大工町だということ（須原家文書）。したがって、にわかに衰微はしていったかもしれません、

海辺大工町の持つ役割というのは幕末まで残るといっていいです。幕府の方は両国橋の御用を務めているということもあるし、順達も海辺大工町から行くのだけれども、実際の商売上の取引の問題、運航状態を見るとだんだんと海辺大工町から離れていってしまつて小網町だということになると、それは小網町との間に揉め事も起こるでしょう。だから衰微していくというのは仕方がないかもしれませんが、ただし17世紀の後半までは確実に海辺大工町というのは、荷物の揚げ降ろしをする場所として最適な場所、とくに利根川から来る最適な場所であったことは間違いありません。

私はこのようなイメージを持っています。当たっているかどうかわかりませんが、一昔前に上野駅という駅、東北の人たちにとって東北を感じる事ができる場所という時代があったと思います。それが今はだんだんと変わってきたのではないかと思いますが、同じように17世紀後半の海辺大工町というところ、関東の言葉が飛び交い、あそこへ行けば北関東の茨城言葉や上州言葉が飛び交っていた地域ではないかと思うのです。ですからそこへ行けば関東が分かる、そういう場所であったのではないかなと思うのです。常陸から上

野・下野、場合によっては奥州からの荷物も来れば、そこで何かしらの雰囲気を楽しむことができる。この17世紀後半に芭蕉が深川へ移ってきます。単に日本橋小田原町から川向うの世界へ移って来たのではなく、川向うより先に、関東・東北が見えていたのかな、という気もしています。こういった気持ちで見ると、また違った形でこの地域が見えてくるのではないかと思っております。

最後に、私はお配りした資料に「流通世界にとどまらない」と書きました。今日は流通の話、商人の世界でしたが、小名木川のイメージは、流通世界だけで作るものではありません。中川船番所資料館には旅人の様子が書かれています。開東の内陸へ行った紀行文の展示もあります。ぜひ、展示を通して小名木川のいろいろな世界を楽しんでもらいたいと思います。この先小名木川を全部埋め立てるといことは多分行われなないと思いますので、永久に残る史跡であると思っておりますし、そう信じております。何年後、何十年後小名木川の景観は変わっているかもしれませんが、小名木川を中心とした研究がますます進んでいくことを願っております。ありがとうございます。

校歌に見る江東区の原風景

【日時】2月21日(土)～3月28日(日)

【場所】中川船番所資料館 1階

エントランスホール・資料閲覧学習室

わたしたちは小・中学校で、入学式や卒業式といった節目ごとに校歌を歌う場面に出会ってきました。校歌を歌ったり聞いたりすることで、「その学校にいる」ということを認識させられたことでしょう。校歌は明治時代以降に学制が公布され、近代教育制度が作り上げられる過程において登場してきました。戦前までは、校歌を歌うことにより愛校心を醸成するとともに、日本国民としての道徳をも身につけさせられるような存在でありました。とこ

第二辰巳小学校30周年資料室に

みなさんからいただいた

民俗資料展示中!

文化財係では区民の方々から、昔懐かしい道具類を民俗資料として寄贈していただいておりますが、現在6000点を超える資料たちは中川船番所資料館の収蔵庫やその他いくつかの倉庫に眠っています。なかでも最も多くの資料を保管しているのが旧第二辰巳幼

ろが、戦後に入り自由教育の波が訪れると、歌詞の語句などがより平易でわかりやすいものとなり、どの学校にも校歌が作られていくこととなりました。

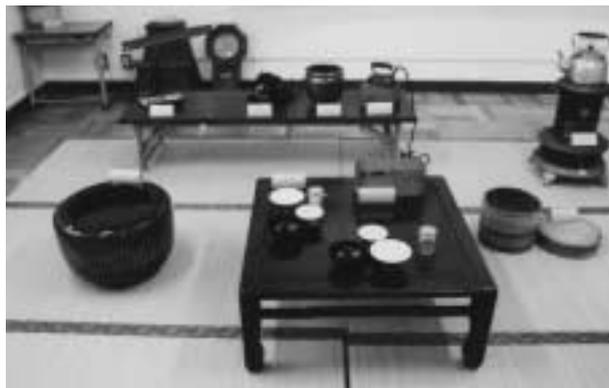
さて、校歌の歌詞には教育理念などとともに、地域の特色が入れられることが多くありました。これは子供たちに未来における地域の担い手としての意識を感じ取ってもらう目的があると思われまます。したがって、わたしたちが歌ってきた校歌をみていくと、その地域の特徴を見て取ることができるとになります。

この展示では、「校歌にみる江東区の原風景」ということで、江東区の地域的特色を紹介するとともに、校歌の歴史的なつながりについてもみていきます。

稚園の校舎を利用した倉庫です。こちららは区立第二辰巳小学校(辰巳1)と同じ敷地ということもあり、この度、同校の開校30周年を記念した資料室に冷蔵庫やお釜、七輪や練炭など18点の民俗資料が貸し出されています。資料は「昭和の生活コーナー」に展示されていますが、その他にも「昔の教科書コーナー」、「30年前の給食再現」など先生方手作りの解説板も豊富で、生徒だけでなく父兄さんたちにとっても

第5回「江東ふるさと歴史研究」入選者表彰式

去る12月19日に、第5回「江東ふるさと歴史研究」の入選者表彰式が江東区教育長室において行われました。入選されたのは岩松精氏と増田宏氏で、



展示されている民俗資料たち

ても懐かしくてもおもしろいものとなっています。展示を担当された水鳥先生は「資料を集めるのに苦労しましたが、子供たちには実物を通して昔のことを知ってほしいです」と話されていました。資料室は3月中旬まで公開されていますが、たくさんの子供たちの目にふれて民俗資料たちも幸せ一杯だと思えます。

日頃の地道な研究の成果が評価されました。入選論文は「江東ふるさと歴史研究」5号として、文化財係で有償(3000円)頒布しますので、是非ご覧になってください。選考された論文の一覧は次のとおりです(敬称略・五十音順)。

入選

『瓢池園』と『旭焼』 深川を通り抜けていった近代陶磁器産業

岩松 精(江東区高橋)

「慶応二年の打ちこわしと深川」

増田 宏(港区芝)

佳作

「三月十日空襲 炎と影の記録」

及川 哲(江東区白河)

「海辺化と堀辺化における寺院と神々

江戸時代・深川の宗教的特質序論」

小野沢永秀(江東区北砂)

「北方領土と深川の四傑」

桑名 正行(江東区古石場)

訃報

江東区登録無形文化財(工芸技術・染織)保持者鈴木保氏(大島6 25 1)は、去る12月17日に逝去されました(81歳)。

謹んで追悼の意を表します。